

地方都市における複合交流施設の効果に関する研究

鈴木 由花¹・高野 伸栄²

¹北海道大学大学院工学院北方圏環境政策工学専攻 (〒060-8628 北海道札幌市北区北13条西8丁目)
E-mail:door@ec.hokudai.ac.jp

²北海道大学大学院工学研究院准教授 (〒060-8628 北海道札幌市北区北13条西8丁目)
E-mail:shhey@eng.hokudai.ac.jp

現在多くの地方都市での中心市街地空洞化への対策として、中心市街地活性化基本計画を作成し、集約型都市構造（コンパクトシティ）を理想とする都市の開発が進められている。本研究では岩見沢市中心部に整備された市民交流施設利用者の個人の行動の変化に着目することにより、心理面を含む施設の利用者に与える影響や役割を分析し、多面的な効果について明らかにした。加えて施設の課題と今後の展望について述べた。

Key Words : Compact city, Central city activation, exchange complex, time geography

1. 研究の背景

現在、地方都市の中心市街地の衰退、自動車依存型社会の形成、都市経営コストの増大等、連鎖的で様々な問題がある。原因には少子高齢化、人口の流出、大型スーパーの郊外出店やそれに伴う居住エリアの拡大などが考えられる。このような社会情勢を背景にして、国土交通省により持続可能な集約型都市構造化という基本方針の明確化がなされ、持続可能な集約型都市構造（コンパクトシティ）を理想とする都市開発が進められている。内閣府に認定された中心市街地活性化基本計画に基づき、活性化目標を定量化しその達成度により、計画内容は評価される。

例えば北海道岩見沢市¹では平成20年に中心市街地活性化計画を策定し、中心市街地居住人口と、中心市街地歩行者通行量（平日）と中心市街地従業者数で目標値を設定し、達成のために道路の整備や岩見沢市駅周辺にて住民参加型のイベントの開催、市民の交流の場となる施設の整備等を行った。しかしどの指標も達成されることは無かった。（平成26年5月段階）

筆者は制度やインフラの整備に加え、住民のニーズや心理、感情を分析し、個人の行動に着目すること、活性化達成のために設定した基本概念からさらに進んだ波及効果について考察・分析することにより、より効果的な活性化の計画の作成につなげることや他の多くの市町村の活性化の計画作成への指針となると考える。

2. 研究の目的

意識の変化は数値などにして測ることは難しいが、「意識の変化は行動に表れる」と考えた。そこで本研究の目的を、「個人の行動に注目し、岩見沢の複合交流施設が利用者にも与えた影響と利用者にとっての役割を明らかにすること」とする。

本研究の調査対象として岩見沢市の複合交流施設を選択した理由は岩見沢市が平成20年に内閣に中心市街地活性化基本計画が認定され、集約型都市の形成を目指して活性化を進めている都市であり、二期に分けて計画が立案、実施され、現在はその二期の計画が進行中である。本研究の対象施設である市民交流施設も平成24年に開業し、利用者数が増加中であり、地域住民に受け入れられている最中であると考えられ、施設の影響や行動変化の過程やその理由を調査するのに最適なタイミングであると考えたためである。

3. 研究の対象

本研究では、岩見沢市内の市民交流施設「であえーる岩見沢²」を研究対象とした。

(1) 岩見沢市

岩見沢市は北海道空知地方にあり、空知総合振興局の所在地である。（図-1）総合振興局とは北海道の行政区



図-1 北海道岩見沢市

画の一つで北海道庁の出先機関として道内の各地域に置かれる。札幌から約40kmの石狩平野東部にあり、岩見沢市は空知炭鉱地域の中心部として、かつ広域交通の結節点として、商業都市として、行政機関の集積地として、また大学も有し、行政・教育の中心都市としての役割を担っている。平成18年には隣接する栗沢町、北村を編入合併し、人口は86,570人（平成26年6月30日現在）となっている。

岩見沢市は中心市街地として、商業業務施設、交通拠点施設、公共公益施設等の南空知広域圏の生活拠点として都市機能が集積する地域に、生活定住、教育文化、あるいは福祉などの都市機能の集積が見込まれる、駅北地区を含めた147haを位置づけている。中には研究対象である「であえーる岩見沢」をはじめ、5つの教育機関、6つの病院、8つの市場・商店街がある。岩見沢駅は平成12年に駅舎が消失し、平成21年に新しく複合駅舎施設が完成した。

交通環境は市の中心部にJR函館本線とJR室蘭本線が通り、札幌に近い西側の地区は住宅地としての開発が進んでいる。市南部には岩見沢インターチェンジを有し、主要幹線道路としては国道12号線、国道234号線が市内を通過しており、交通利便性は高い。しかし2本の国道が岩見沢市中心市街地からは遠く、自動車利用者が市中心部に立ちよりやすい環境ではない。

岩見沢市は北海道内でも雪の多い地域あり、「除排雪対策本部」を設置して24時間体制で除排雪に取り組んでいるが市道の長さから除排雪費用の軽減化・効率化が課題となっている。岩見沢は鉄道の町としても有名であり、かつては周辺の炭鉱開発が進む中、鉄道が交わる「鉄道のまち」として栄えた。現在は、炭鉱閉山により鉄道路線が廃止され、鉄道の要衝としての役割は担っていない。また食料基地としての位置づけとして確かな地位を築いており、近年、農家戸数は減少傾向にあるが経営規模は拡大を続けている。

(2) であえーる岩見沢

「であえーる岩見沢」は中心市街地の賑わいの拠点として2012年に岩見沢市がリニューアルオープンさせた市民交流施設である。（図-2）JR岩見沢駅の南側の徒歩5分ほどのところに位置し、岩見沢市が設定する中心市街地内に位置する。（図-3）周辺には4条通り商店街や栄通商店街、ナカノタナ市場など、地元の商店とも連携の取りやすい位置関係にある。

「であえーる岩見沢」の入居しているビルは「岩見沢ポルタ」という岩見沢市が所有している再開発ビルである。この「岩見沢ポルタ」は、岩見沢市の中心市街地活性化を目的として第一種市街地再開発事業によって建設され、開業から20年以上にわたり核店舗として西友が入居していたが、2009年に撤退しこれに合わせて複数の有力テナントが撤退した。この西友の撤退を最後に岩見沢市中心市街地内には大型デパートがなくなり、食品スーパーに限るとJR生鮮市場岩見沢店のみになった。その後ビルを所有していた第三セクターの岩見沢市開発株式会社が経営破綻し、民間による再生を図ったもののキーテナントの誘致ができず、民間での再生を断念した。これを経て、市がビルを買い取り地下階から2階を民間で商業施設等の誘致を、3階及び4階を岩見沢市で公益施設の導入及び業務系企業の誘致を行い、官民が連携して再生に取り組んだ。現在の「であえーる岩見沢」はJAIいわみざわのスーパーマーケットAコープであえーる店を核店舗とし他34店舗及び公共施設にスポーツ施設に加えて



図-2 であえーる岩見沢

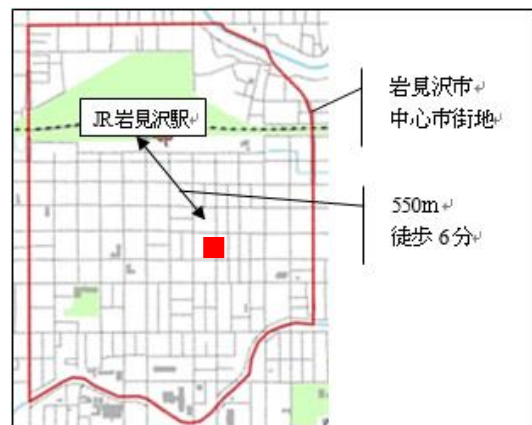


図-3 岩見沢市中心市街地

「交流空間」から構成されている。この「交流空間」は「であえーる岩見沢」の大きな特徴であり、基本概念を「まちなかに『寄る』場所をつくる」としている。その実現の仕掛けとして作られた交流空間は「であえーる岩見沢に新たに誕生した「交流空間」は、市民の皆さんが集い、楽しみ、つながる空間です。個人でも、団体でも、情報発信や作品発表の場として、また憩いの場として、お気軽にご利用いただけます。」と定義されている。交流空間とは様々な特徴を持つ施設の総称であり、本研究ではその中の3つの施設を対象施設とする。

a) ひなた広場

「であえーる岩見沢」の2階、外からの入り口と駐車場口すぐのところに位置する。広さは約 100m²あり、木製と金属製の机椅子が約 40 名分ある。天井は 3 階天井まで吹き抜けになっていることと、ガラス張りの壁により、明るく開放的な印象を与える。(図-4) 自動販売機は 4 台常設されている。開放時間は「であえーる岩見沢」と同様に 9 時から 20 時であり、絵画や写真、書などの展示やセミナー、ワークショップ、各種販売会なども開催されることもある。利用用途に制限は無く、食事や読書、休憩、また友人との会話にと、様々な用途で利用されている。開店から閉店まで常に多くの人が利用しており、一時間毎の計測平均滞在者数(アンケート調査と同時に滞在者数の計測を行った。調査時間(10 時～18 時)中の一時間ごとの利用者数の計測。)は 20 名であった。

b) KIDSはらっぱSORA

「であえーる岩見沢」の3階にあり、「育児支援施設ひなたっ子」に隣接している。約 230m²の広さで人工芝が敷かれており、大きな変形型滑り台と長く大きな 2 本の土管型遊具と、保護者観覧用ベンチがある。(図-5) 同階には子ども用トイレや手洗い場の設置もある。室内型公園となっており、天候や車などの交通を気にすることなく遊ぶことができる。利用対象者が小学生以下に限定されていること、ボール遊びが禁止されていることから、保護者としては安心して遊ばせられるような配慮がなされている。天井が 4 階天井まで吹き抜けになっていることから開放感がある。開放時間は 9 時～18 時であり、ひなたっ子の営業日のお昼時や小学生の学校が終わる時間帯は特に賑わいを見せ、最も多い滞在者数だと 12 名ほどが利用していた。

c) 学習広場

「であえーる岩見沢」の4階にあり、非常に静かな空間である。身長ほどの扉で仕切られた完全に私語厳禁となっている空間と複数人で利用できるスペースからなっている。(図-6) 近隣の高校が授業終了の時間を迎えるとともに利用者が増え、17 時過ぎにはかなり高い利用率となる。高校や大学、専門学校のテスト期間ともなる

と約 70 名分ある席が満席となり、座れなくなるほどである。特に監視員がいるわけでもないが、終始会話等はほとんどなく、開放時間終了とともに準備をして帰路に着くなどの規律正しい利用が守られている。飲食は禁止されていないが、友人らと少し何かを食べて休憩したいときは、2 階のひなた広場を利用するなど、利用者同士の配慮が感じられる。

本論文では「であえーる岩見沢」のような民間商業店舗空間と市民の滞留空間としての機能を持つ(ここでは「交流空間」のこと)空間の共同施設を複合交流施設と呼ぶ。



図-4 ひなた広場

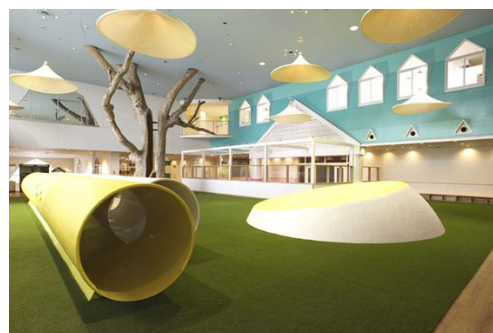


図-5 KIDSはらっぱSORA



図-6 学習広場

4. アンケート調査

(1) 実施

複合交流施設の利用者の現状を明らかにすること、複合交流施設の有無による行動の変化を尋ね、行動変化表を作成することを調査の目的とした。内容と回収結果は以下の表-1、表-2の通りである。

(2) 単純集計結果

「ひなた広場」は定期的な利用者の割合が6割であり、特に週5回以上一日に8時間ほど滞在すると回答したグループがあったが、このような方々にとっての「であえーる岩見沢」の果たす役割は非常に大きく、日常生活の一部となっていると言える。(図-7) 利用同伴者に関する質問では、申し合わせてはいないものの、偶然会った友人と時間を過ごすという回答もあり、「ここに来れば誰かがいる」という安心感を与えていると言える。(図-8) 改善点としては、空調に関する不満(暑い寒い等)や滞在設備に関する不満(椅子机)が目立ったこと、また「ひなた広場」の基本は時間を過ごすことであると考えられることから、満足度の向上のためには滞在空間の向上が最も大きな効果を生むことができるといえる。

「KIDS はらっぱ SORA」は利用満足度や生活向上度などを見ると非常に評価が高いが利用者数は多くは無いので、課題は周知されることであると考えられる。(図-9) 加えて、「KIDS はらっぱ SORA」利用者は車の利用率が6割を超えているため、駐車場の整備が徒歩による利

用者のための冬季交通の改善が利用者増加には必要である。(図-10) また、地元小学生による利用も多く、鬼ごっこや小型ゲーム機を利用して遊んでいた。学年の隔てなく遊んだり、未就学児とも遊んだり、良い環境で遊ぶことができる空間となっている。児童館のような役割も果たしており、周辺徒歩圏内に3つの小学校がある立地条件であることと冬季でも運動できる空間であることから、認知度向上による利用者の増加が期待できる。

「学習広場」は利用者数も多く満足度も高い。(図-11) 理由としては、無料で使えること、立地がよいこと(高校と駅の間にある)、学習環境として優良であること(私語厳禁の空間とグループ利用可空間との併設)等があげられた。これらの要因から、学校図書館や塾・高校の自習室よりも支持されていると考えられる。

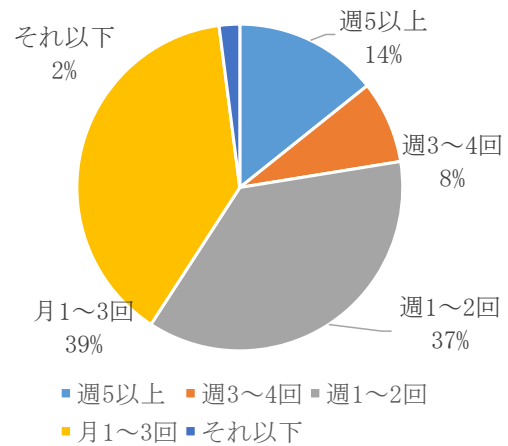


図-7 「ひなた広場」利用頻度 (n=49)

表-1 アンケート調査内容

期間	平成25年12月20日(金) ~平成25年12月21日(土)
場所	「であえーる岩見沢」内の3つの交流空間 「ひなた広場」、「KIDS はらっぱ SORA」 「学習広場」
対象	各交流空間の利用者
方法	面接調査法
設問内容	1) 個人属性 2) 各交流空間について 3) 交流空間以外の「であえーる岩見沢」の利用について 4) 交通手段に関して 5) 「であえーる岩見沢」有無による行動の変化(時間、目的地、住所、交通機関)

表-2 アンケート回収内容

	回収結果(部) (調査項目1~4)	回収結果(部) (調査項目5)
「ひなた広場」	49	36
「KIDS はらっぱ SORA」	11	8
「学習広場」	25	21

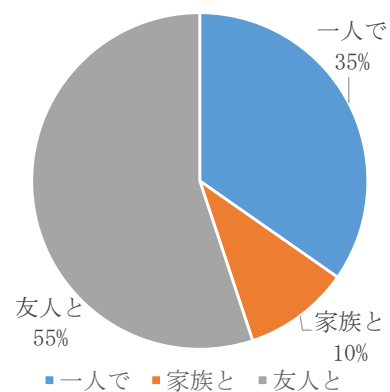


図-8 「ひなた広場」利用同伴者 (n=49)

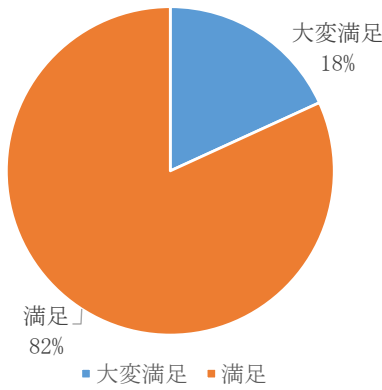


図-9 「KIDS はらっぱ SORA」 利用満足度 (n=11)

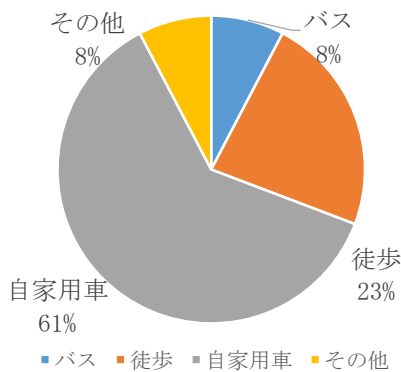


図-10 「KIDS はらっぱ SORA」 交通手段 (n=13)

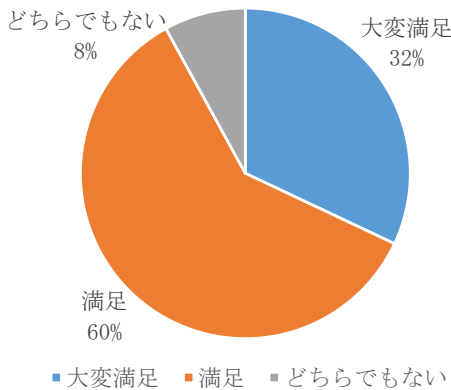


図-11 「学習広場」 利用満足度 (n=25)

とである。この表現方法を用いることにより、行動選択、行動変化の理由や複合交流施設の果たした役割や与えた影響等まで、詳しい分析を行うことができる。図-12 左側の直方体が岩見沢市中心市街地を、直方体の中の破線が「であえーる岩見沢」を、直線が個人の時空間経路を表す。本研究での時空間経路は自宅がスタート地点であるので、時間軸に平行な自宅滞在を表す直線から始まっている。また図-13 から図-16 までは、左の図が『「であえーる岩見沢」あり』、右側が『「であえーる岩見沢」なし』の時空間経路である。4つの図の構図が一定で無いのは、実際の住所から時空間経路を作成した為で、行動変化の内容が把握しやすいよう角度を適宜調整したためである。行動変化票から時空間経路図を作成し、その考察を行うことにより、「であえーる岩見沢」が利用者にも与えた影響や果たす役割、また岩見沢市中心市街地に及ぼす影響について分析を行う。

「であえーる岩見沢」を利用する目的別に、作成した時空間経路図の考察を行う。まず行動パターンを「であえーる岩見沢」を利用する目的が本源需要であるか派生需要であるかに分類した。さらに本源需要には「交流のため」「遊ぶ・遊ばせるため」「学習空間の確保のため」、派生需要には「時間の有効利用のため」「運動の目的のため」と細分した。(表-3)

本源需要の「交流のため」「遊ぶ・遊ばせるため」では、それらの目的のために「であえーる岩見沢」を訪れており、外出そのものの目的であるために「であえーる

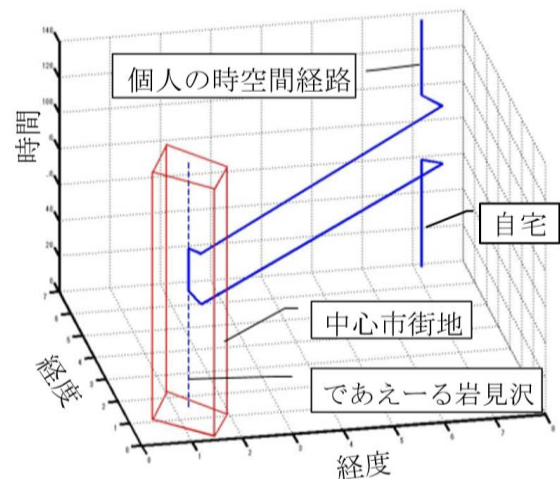


図-12 時空間経路図

5. 分析

本研究では、行動変化票の分析にあたって、時間地理学の時空間経路(図-12)による表現手法を採用した。時間地理学の時空間経路とは、時間軸と空間軸を用いて、個人の生活経路を時間に沿って表すことができる図のこ

表-3 需要の分類

	本源需要	派生需要
ひなた広場 (n=85)	35	50
KIDS はらっぱ SORA (n=12)	12	0
学習空間 (n=28)	28	0

岩見沢」の利用者の生活における役割は非常に大きい。また「学習空間の確保のため」では、多くの利用者は高校の帰り道に「であえーる岩見沢」により勉強をしてから帰宅する。JRやバスが来るまでの時間や、迎えが来るまでの時間、部活の待ち時間を学習時間に当てている。勉強の場所の選択理由の多くが「無料で使えるため」や「友人と利用できるため」であり、施設の特徴が理由で

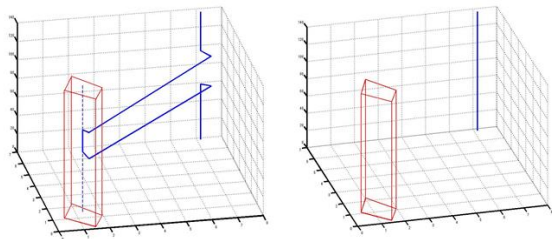


図-13 行動 i 友人との会話を楽しむため

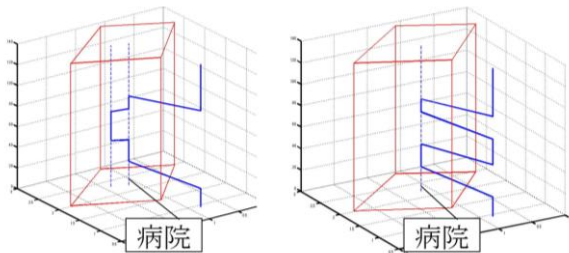


図-14 行動 ii 病院の待ち時間過ごし

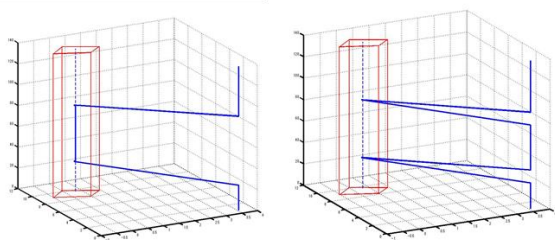


図-15 行動 iii 子どもの送り迎え間の時間過ごし

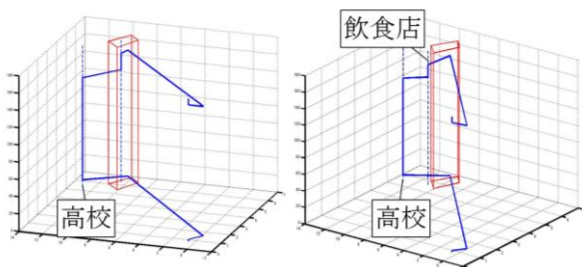


図-16 行動 iv JRの待ち時間過ごしと勉強

あることから本源需要とした。派生需要の「時間の有効利用のため」「運動の目的地のため」では生活の効率化や生活満足度の向上、生活に彩を与えることに役立っている。

その中から、波及効果がある行動に着目した。各交流空間にて波及的に目的や役割が増えていくことにより、「であえーる岩見沢」は非常に多様な用途を持つ。その波及効果を見るために、その行動の中から特に個人個人の行動に着目し、「であえーる岩見沢」の果たす役割や与える影響の大きい例について考察する。

a) 行動 i 友人との会話を楽しむため (図-13)

この行動では、「であえーる」が外出の目的となり、「であえーる」が「定期的な運動」「交流の場への誘導」など、多くの役割を担うと言える。

b) 行動 ii 病院の待ち時間過ごし (図-14)

病院の待ち時間を「であえーる岩見沢」で過ごす行動を表す。なかった場合は家との往復を余儀なくされるので、この場合では「であえーる岩見沢」がある場合に比較して約倍の距離を歩かなければならない。「寄る」が「一定時間の滞在」となり、「であえーる岩見沢」は「総必要歩行距離の短縮」や「自由に使える時間の延長」等の役割を果たす。

c) 行動 iii 子どもの送り迎え間の時間過ごし (図-15)

子どもを車で 15 分の距離のところへ送り迎えする行動である。「であえーる岩見沢」により、総走行距離の短縮、活動に使える時間の増加、燃料の節約等ができる。

d) 行動 iv JRの待ち時間過ごしと勉強 (図-16)

JR とバスを利用する高校生が、交通手段間の隙間時間を「であえーる岩見沢」で過ごす。目的地にたどり着くまでに複数の交通機関を使わなければならない場合、多くの場合、交通手段の乗り換えで差が発生してしまい、待つことを余儀なくされる。「であえーる岩見沢」は「寄る」という行動により、発生してしまう隙間時間を活動時間へと変える役割を担う。加えて、この利用者は「であえーる岩見沢」の代替施設を「モスバーガー」と回答していたが、これは飲食店等での長時滞在の問題となる。「であえーる岩見沢」はこのような事態に対しても抑制効果があると言える。

6. 考察と今後の展望

(1) 「であえーる岩見沢」に「寄る」という行動をとることにより行動に大きな影響があったケースについて、(2) 「であえーる岩見沢」により行動変化を起こすことができた原因について、(3) 更なる活性化に向けて、以上の 3 点に関して考察を行う。また (2) (3)

では各交流空間についても考察を行う。

(1) 「であえーる岩見沢」に「寄る」という行動をとることにより行動に大きな影響があったケースについて

子どもの送り迎えのために一旦帰宅しなければならない行動や、交通機関間の隙間時間を、「寄る」という行動をとることで、複数の目的を果たしていることがわかる。また、「であえーる岩見沢」建設時に設定したとされる各交流空間の利用目的は、「交流の場の利用」「行動の効率化」「学習広場空間の提供」「安心できる子育て空間」等様々あるが、こちらに関しても「寄る」から様々な波及効果があったように、多様な波及効果が生まれると予想される。

このことから「であえーる岩見沢」は多様な役割を担い、それによりさらなる効果を生み出す能力に優れているといえる。多様な役割がより多くの人に認知されることで指数関数的に役割の増加を見込めると考えられる。

また「寄る」という行動には目的と目的をつなぐ役割があり、その効果から周辺施設の相乗的な活性化を見込める。そのためには「であえーる岩見沢」と周辺施設の関係の強化が課題であると言える。

「であえーる岩見沢」は現段階でも多様な役割を担い、影響を与えており利用者も順調に増加している。一方で岩見沢市全体では人口の減少や中心市街地の人口さらには基本計画の達成指数である中心市街地居住者数人口、中心市街地歩行者通行量、中心市街地従業者数も達成していない。「であえーる岩見沢」による行動変化をまち全体の活性化につなげることが今後の課題であると言える。

(2) 「であえーる岩見沢」により行動変化を起こすことができた原因について

「であえーる岩見沢」はバスターミナルと JR 岩見沢駅に非常に近く、加えて高校や専門学校とバスターミナル・JR 駅の通り道となっている。また岩見沢は居住エリアが広域で、JR やバスの利用者が多いという特徴があり、「であえーる岩見沢」の立地条件が活きやすいと考えられる。また、「であえーる岩見沢」の前身は集客数がかかりであった大型デパートで、人が集まる習慣ができていたと言える。交流空間ごとでは、それぞれが特徴をしっかり持っていることから、複数の交流空間を利用している様子が非常に印象的であり、それが満足度を高くしていると言える。

a) 「ひなた広場」

「ひなた広場」は空間の利用自由度の高さと周りの目が気にならない空間作りが利用者の多さを引き出していると言える。自由度の高さに関しては、「ひなた広場」の空間は食事・読書・会話・勉強等様々に利用されてお

り、例えば会話や食事等の一切の制限がなく利用者がそれぞれ思いのままに過ごすことができる。周りの目が気にならない空間作りに関しては、天井が高いこと、通路のスペースがしっかり確保されていること、オブジェがあり人の目から四角になる部分があること、十分な数の椅子机があることが、特定の人に視線が集まらず、居心地の良い空間を作り出すのであろうと考えられる。

b) 「KIDS はらっぱ SORA」

十分な広さがあること、安全性の高さ、利便性が人を集めることにつながると考える。子どもの目線からだど、居心地の良さ・遊びやすさが最も大事な項目であり、汎用性のある遊具や十分な広さがそれにつながっているといえる。加えて、小学校から近く、放課後に家にかばんを置いてすぐにいける距離にあることも重要な要素である。また保護者の目線からだど、ボール遊びが禁止されていることから安全性の高さや、食事用椅子机があり便利であること、加えて学校からの距離の近さや全天候型施設であることも安心感につながる。

c) 「学習広場」

個人に沿った利用がしやすい環境づくりと利用者同士の配慮が良い学習広場空間を作りだしていると考えられる。ここの特徴はどのように学習したいか（私語厳禁な空間で or 友人と会話しながら）などの自分にあった利用方法を選ぶことができる。そして利用者同士がお互いに気を配り、会話ができるコーナーでも私語厳禁の空間に邪魔にならないようになど、利用者同士の意識を生み出すような空間作り已成功していると言える。

(3) 更なる活性化に向けて

「であえーる岩見沢」はそれ自体で人を集めており、中心市街地全体や周辺商店街との連携という観点ではあまり進んでいないといえる。また、利用年齢層が高めであることから、生活に不可欠な施設（病院や生涯学習施設等）との連携もあると、利用の幅がさらに広がり、生活満足度の大幅な向上につながると考える。また、まち全体としても雰囲気や、空き店舗からの空洞感を払拭できれば、更なる活性化に繋がる。

a) 「ひなた広場」

滞在空間としての意識を挙げることが不可欠である。利用者層に幅があること、十分な広さがあることから、空間の色付けが効果的ではないかと考える。例えばソファ一席や、電車のような優先席、勉強を進める空間や、利用人数の多い人に勧める席等の仕分けである。それにより自由度の減少も考えられるが、満足度の向上により結果的に利用者の増加が見込めるのではないかと考えられる。

b) 「KIDS はらっぱ SORA」

周知度の向上が課題である。この空間は高機能であり、

且つ子どもが遊ぶ場所であることから、安心感の向上が重要な要素であると考えられるため、ひなた広場との連携を提案したい。「KIDS はらっぱ SORA」の空間内に意見交流の場を設け、子育て卒業世代と現役子育て世代とが意見交換できるようにし、「KIDS はらっぱ SORA」を子どもの遊ぶ空間としてだけではなく場としての利用を促進する。加えて、子育て卒業世代の方のみになった場合でも、子どもの見守り役としての機能も果たして頂けると考える。子どもはより安全に、子育て世代は意見交流、子育て卒業世代は充実感の向上といった効果を生みだせると期待できる。

以上のことから、「であえーる岩見沢」は全体的にも交流空間ごとに見ても、行動変化を引き起こすことが出来る要素、今後改善すべき要素がある。今後は、「であえーる岩見沢」による行動の増加や引きこもりの解消度、生活の充実度・向上度といった項目を組み合わせ、指標化することができれば、他の活性化計画の評価や改善案計画などへの応用の可能性がある。

謝辞：本研究ではアンケート調査を「であえーる岩見沢」にて面接調査により行いました。アンケートの調査にご協力いただきました岩見沢市経済部中心市街地活性化推進室中心市街地活性化推進係主事の小山智之様、(株) 振興いわみざわビル管理係逢坂尚樹様、そして「市民交流施設であえーる岩見沢」ご利用の皆様に感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 岩見沢市役所, 岩見沢市,
<http://top.city.iwamizawa.hokkaido.jp/>, 2014/07/31
- 2) (株) 振興いわみざわ, 市民交流施設であえーる岩見沢, <http://www.iwa-deaeru.jp/>, 2014/07/28

(? 受付)

AN EFFECT OF TOWN EXCHANGE COMPLEX ACTIVATION IN A LOCAL CITY

Yuka SUZUKI, Shin-ei TAKANO

Nowadays, many local cities form a central area activating plan to prevent depopulating of central area. And they push forward the plan in order to develop the city which is called a compact city. In this study impact and role of exchange complex in city of IWAMIZAWA were analyzed focused on change of individual action due to the institution. Then various effects were clarified too. Finally problems about the institution and prospects for the future were mentioned.